



北京の香山

紅葉からの連想

北京の秋は明るくて清々しい。霧もないし風に吹かれてくる砂ぼこりもなく、太陽に照らされた青空が広がり、大きな樹木の間からは白い雲が姿をのぞかせる。

西山をゆっくり歩いていると、雁が南へ飛んで行くのが見えた。西山の紅葉は赤い雨のように舞い落ち、傅抱石①の描く「落楓図」を出現させていた。詩情あふれる光景に私はうっとりとした！まさに將軍詩人陳毅②が詠んだ「西山紅葉好、霜重色愈濃」のようだ。晩秋の寒気はどこかへ行っていた。

①傅抱石(1904-65)……画家、篆刻家、美術史家。日本の帝国美術学校（現武蔵野美大）に学んだ。

②陳毅(1901 - 1972)……軍人、政治家、外交官。国家建設において功績を上げた重鎮。「西山紅葉好……」は陳毅が詠んだ詩。北京の西北の郊外、西山の東麓にある香山は全山がハゼの木に覆われ、霜が降りる十月下旬になると赤く色づき名勝の地となっている。

紅葉から陳毅の詩を連想し、その詩から陳毅を連想し、陳毅から陸小曼③のことを思い出した。陸小曼は女流画家で、1920年代の有名詩人徐志摩の夫人だった。14年前に病気で亡くなり、ちょうどこの日は重陽の後の10日目、彼女の誕生日にあたる。重陽登高④をしようかと考えていたのだが、山道は起伏がはげしいことを思い出し、

昔のことが脳裏に湧き上がってきたので、紅葉から連想したこと、重陽の古い思い出を書いた。しかし「古い」話ではあるが現実的な意義も少しはある。これを陳毅と小曼に黄色の花として捧げたいと思う。

③陸小曼(1903-1965) ……国画家。最初の結婚をしたあと詩人の徐志摩(1897-1931)と結婚した。結婚後、豪華な生活に慣れていた陸小曼の生活を支えることができず夫婦は不仲になり、そんな中で徐志摩は飛行機事故で亡くなった。

④重陽登高……重陽(旧暦9月9日)には邪気を払い長寿を願うために菊を飾り、菊の花びらを浮かべた酒を飲み交わして祝っていた。またこの日に郊外の高い場所へ出かけて遠くを見るという風習もあり、これが重陽登高と呼ばれる。

陳毅は上海の人々が敬愛した政治の指導者で、解放直後上海の政治を支え、多忙な中であって文芸事業に興味を持ち、芸術家たちに関心を示した。

当時小曼は体が弱く病気がちで生活はかなり困窮していた。気分も沈みこみ元気がなかった。絵を善くしていたのだが、興味を失い、描くこともおっくうになっていた。彼女は若い頃、明の沈周⑤の絵を勉強したことがあり、賀天健⑥について学んだこともあった。彼女は山水画だけを描いていたが、その絵は画家に似て瀟洒であか抜けていて、彼女の文学的素養とは切り離せないものだった。

上海美術協会が催したある展覧会に、小曼も何幅かの絵を出品した。この展覧会で彼女の絵に陳毅が注目した。陳毅は目を大きく開けて観賞し、驚いたように独り言を言った。「いい絵だ！ 彼女の夫は徐志摩だろ？ 徐志摩は私の先生なんだよ！」

随行人がすぐに小曼の状況を簡単に伝えた。陳毅は聞きながら眉間にしわを寄せ、同情したような表情を見せ、すぐに言った。「仕事を手配して世話をしなければ。」

陳毅のこの態度にみんなは感動した。彼と徐志摩の住む世界はまったく異なっていたのだが、やはり彼らは詩人だったのだ。文字の縁があったのだ。陳毅は小曼を少しも知らなかったのだが、彼女の才能を愛したのだ！

陳毅が絵画展で絵を見てからしばらくたったころ、小曼が電話をかけてきて会いに来てくれと言った。私の顔を見るとすぐに封筒を私に見せた。中には市の人民政府の仕事に参加してくれるように、という内容の招聘状と、華東病院の診察を受けることができるカード、文化倶楽部の身分証明書が入っていた。これを見て私は驚き、彼女にお祝いを言った。これは陳毅が彼女に対して与えた破格の待遇、完璧な配慮だと思った！ しかし彼女は呆然として信じられないようで、どうして陳毅が自分にこのようなことをしてくれるのだろうか聞いた。

私は言った。「あなたが芸術家だからよ！」彼女は突然やってきた知遇之情⑤に涙を流した。彼女の魂は大いに励まされ、生活の保障を得て精神も安定した。彼女は奮起して勤勉に絵を描きはじめ、多くの詩情あふれる山水画を描いた。彼女の絵は国内外で好評を博し、詩と絵が融合した伝統的中国画の傑作だと称賛された。彼女はずっと病気を抱えながら絵を描き、亡くなる前には感激の涙にむせびながら私に言った。「もし国家が面倒を見てくれなかったら、私はもっと前に死んでいた。もし陳毅の励ましがなかったら、私の才能も発揮できなかった！」

事はすでに過ぎ状況も変わった。今日、昔のことを思い出し、陳毅の度量の大きさに思わず尊敬の念を抱いて深く考えさせられた。このような進んだ考え方、行動は讃えるべきもので世に知らせるに値する。このようにしてはじめて才能のある者たちの道が開けるのだ。

私はよく考える。もしも陳毅が健在だったら、彼は必ず我が国の長征の新しい指揮官になっていただろう。さらに私たち文芸隊の元帥となっていたであろう！残念なことに、彼は私たちから永遠に離れて行ってしまった！

ここまで考えて、私は思わず敬愛する周恩来総理をなつかしく思い出した。これらの補うことのできない損失はすべて林彪と四人組が負った血の負債だ。彼らは悪人たちをのさばらせ良からぬ思想をはびこらせ、長いあいだ修練を積み研鑽を重ねた文学者や芸術家を殺した。

何と言う悲惨な災難だったことか！ 詩に曰く「山重水復疑無路、柳暗花明又一村⑦」。十年の動乱は去った。文芸界の老兵はすでにしおれてはいるが、新しい戦士は成長している。百花繚乱の光景が再び現れ、文化芸術の春もすぐに到来するだろう！

一九八〇年一月

⑤沈周（1427-1509）……明代中期の文人、画家、書道家。「南宋文人画中興の祖」と言われている。

⑥賀天健(1891-1977)……中国画家、書道家。『学山水画過程自述』を著している。

⑦南宋の政治家で詩人だった陸游(1125-1210)の詩。「山が重なり、川が入り組んで、もう道がないと思っけていても、前に進んでいるうちに、柳が茂り、花が咲いている村が見えてくることもある。」という意味。